石鎚権現古墳群発掘調査報告

―第6・7・8号古墳―

1981

広島県教育委員会

石鎚権現古墳群発掘調査報告

正　誤　表

頁	行	誤	正
3		第3図　さしかえ	
11	21	用いらられた	用いられた

目　　次

Ⅰ　は　じ　め　に……（1）

Ⅱ　調　査　の　概　要……（2）

Ⅲ　検出の遺構と遺物……（3）

Ⅳ　ま　　と　　め……（11）

例　　言

1　本書は，昭和55年度の国庫補助金を得て，広島県教育委員会が行った石鎚権現古墳群（福山市駅家町今岡所在）の発掘調査報告である。

2　本書の執筆は，嶋田滋・新谷武夫・福島政文が分担して行い，新谷が編集した。

3　遺構・遺物の実測・整図は，執筆者で分担し，写真撮影は嶋田が行った。

4　本古墳群の理解を深めるために，本書と同時に刊行される『石鎚権現遺跡群』（財団法人広島県埋蔵文化財調査センター発行）を併読されたい。

Ⅰ はじめに

本書は大橋地区農地開発事業に係る遺跡の発掘調査報告である。大橋地区農地開発事業は福山市の急速な工業化に伴い，既存農地の転用などにより野菜生産農家の環境条件が著しく劣悪となったので，良い立地条件を持つ駅家町大橋地区に普通畑を造成し，野菜生産団地を造成することを目的とするものである。開発地区の総面積は75.5*ha*，造成面積は49.2*ha*である。昭和47年に基本計画が申請され，昭和53年３月県農政部長から県教育長あてに，事業地内における埋蔵文化財の有無について照会があった。県教委は同年４月分布調査を実施し，遺跡６ヶ所と試掘必要地点11ヶ所を確認し，その旨を回答した。昭和54年９月県農政部長から昭和55年度開発地区内の試掘調査の依頼があり，同月向永谷１ヶ所，大橋２ヶ所を調査した結果，大橋において，住居跡・古墳・土坑群などを検出した。11月県農政部長から設計変更が不可能な為，昭和55年度開畑地区内の遺跡について発掘調査の依頼があり，昭和55年８月文化庁長官あて発掘届を提出した。現地での発掘調査は昭和55年９～10月，昭和56年１月の２回に分けて実施した。また調査経費は370万円（国庫185万円，県負担分185万円）で実施した。

調査を実施するにあたり，広島県福山農林事務所芦品土地改良事業所，福山市教育委員会，地元大橋・今岡・向永谷地区の方々から多大な援助と協力を受けた。記して謝意を表したい。

石鎚権現遺跡群遠景（南東から）

Ⅱ 調査の概要

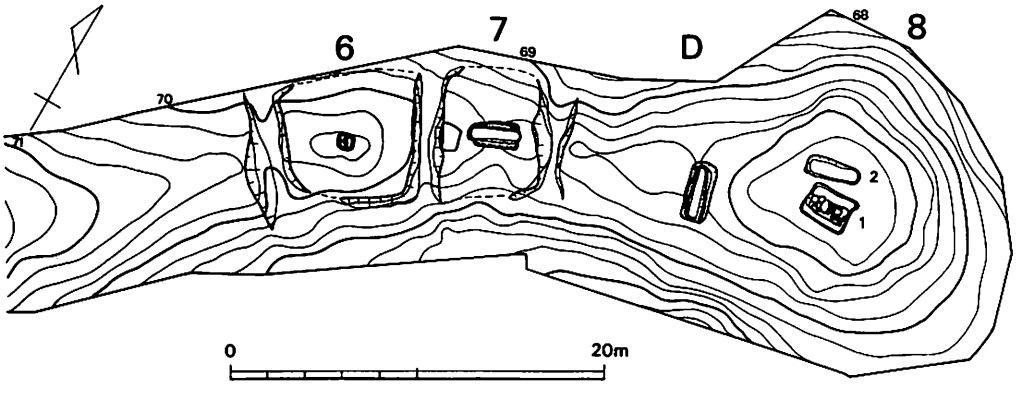
本遺跡は，県営大橋地区農地開発事業地の南東部隅の一角にある。標高70～75m，水田面からの比高35～40mの丘陵尾根上に立地する。調査は，東方にのびる尾根先端付近の鞍部（東西60m，幅9～19m，総面積約790m²）について実施した。調査区域内には当初古墳2基が確認されていたが，全面にわたり表土を除去した結果，新たに古墳1基と土坑墓1基を検出した。発掘調査は，古墳3基・土坑墓1基について行った。古墳は尾根線上に一直線に並び，西方から石鎚権現第6号古墳・同第7号古墳・同第8号古墳とし，土坑墓については，号数を省いて呼称することにした。

第6号古墳は，尾根鞍部に位置し，東西両側の地山を溝状に掘削し，方形の墳丘（7×7.5m）を造り出したものである。墳丘上部は相当量流失しており，主体構造の詳細は不明であるが，主体底部とみられる部位には，小礫が敷きつめられていた。墳丘東裾部において，土師器破片1が出土した。

第7号古墳は，西側の溝を第6号古墳と共有し，東側も地山を掘削して方形の墳丘（6.5×7m）を造り出している。主体は二重土坑で，組合せ式木棺が埋置されていたと考えられる。主体部直上から小型素文鏡1面が出土した。

第8号古墳は，尾根先端に位置する円墳（径14m）で，主体部は箱式石棺と土坑の二つが確認された。墳丘は地山を掘削して整形したもので，盛土部分はわずかであった。箱式石棺からは刀子片と被葬者の歯が出土した。土坑には割竹形木棺が埋置されていたものとみられる。

土坑墓は，第7号古墳の東側，第8号古墳西側墳丘裾部に位置する。長さ約3.2m，幅約1.1m，深さ約0.8mの二重土坑である。土坑内には割竹形木棺が埋置され，木棺直上から鉇1，土師器片1が出土した。

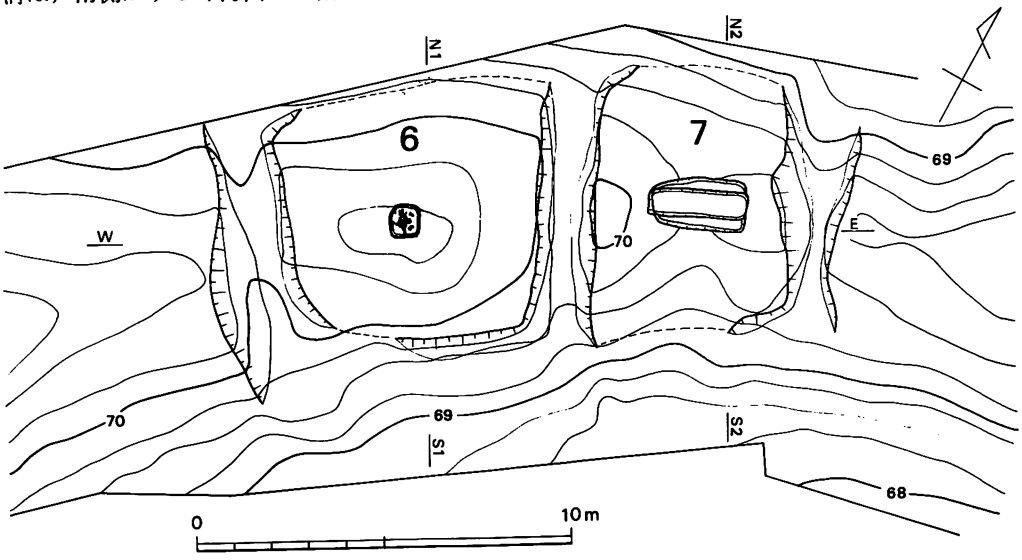


第1図　石鎚権現第6～8号古墳全体図（1/400）（数字＝古墳・主体番号，D＝土坑墓）

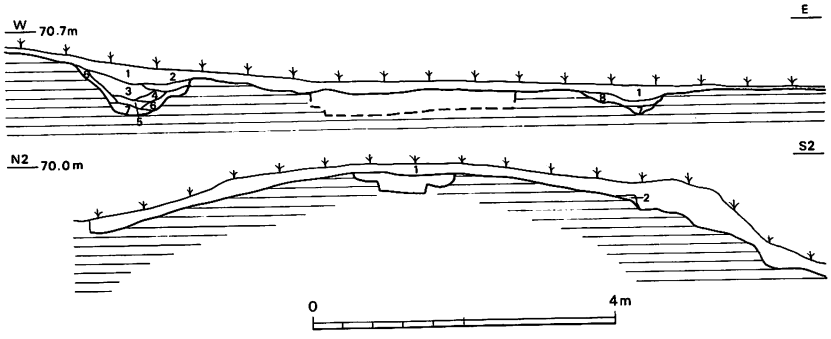
Ⅲ　検出の遺構と遺物

1．第６号古墳（図版２・６）

本古墳は，第７号古墳と溝を境に接し，第５号古墳の東約40ｍ，第８号古墳の西約25ｍに位置する。標高約70ｍ，水田面からの比高約40ｍ，幅７～10ｍの細い尾根上に立地している。墳丘は，尾根に直交する２本の溝（幅1.6～2.2ｍ，深さ0.4～0.6ｍ）を掘削し，その溝内の土を盛ったものである。現存の盛土部分は，10～15cmの厚さでみられるが，大部分は流失したものと考えられる。墳丘の形態は方形で，長さは東西7.5ｍ，南北７ｍ，高さは現在1.2ｍである。墳形は，南辺が北辺より若干短い（約２ｍ）ので，ほぼ，台形を呈している。また，西側の溝は，南側がゆるく湾曲して掘られており，南東隅はやや丸味をもっている。



第２図　第６・７号古墳実測図（1/200）



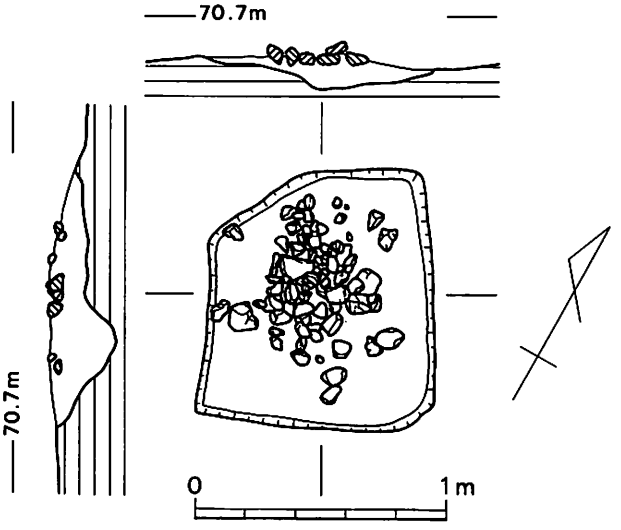
第３図　第６号古墳墳丘断面図（1/100）

1．黄褐色土　2．暗褐色土　3．石　4．黄褐色砂質土　5．暗黄色砂質土　6．黄色砂質土
7．暗褐色土　8．褐色砂質土　9．暗褐色粗砂質土　10．暗黄褐色砂　11．花崗岩風化土

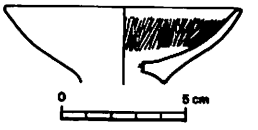
主体部は，ほぼ中央に位置する礫群がその痕跡とみられる。礫群は小角礫（辺長５～10cm）が約70～80cmの範囲にみられる。二層になっている部分も一部みられるが，ほぼ一層である。礫群の周囲には，東西0.9m，南北１m，深さ約0.2mの掘り方がある。掘り方の床面は凹凸が多く，しかも平面形はいびつである。

遺物は墳丘南東隅の溝底部から土師器破片１点が出土したのみである。

土師器（第５図）小型器台の坏部の破片である。口径9.4cm，坏部深さ2.3cmを測る。厚さは３～８mmである。色調は明赤褐色を呈し，胎土は極めて精良，焼成は良好である。口縁はゆるく内湾し，端部は丸味をもつ。坏部内面には細かいヘラ磨きがなされ，坏底部，口縁部はナデている。坏部外面は，磨滅していて不明であるが，ナデ調整と考えられる。



第４図　第６号古墳主体実測図（1/30）



第５図　第６号古墳出土土師器実測図（1/3）

２　第７号古墳（図版３・６）

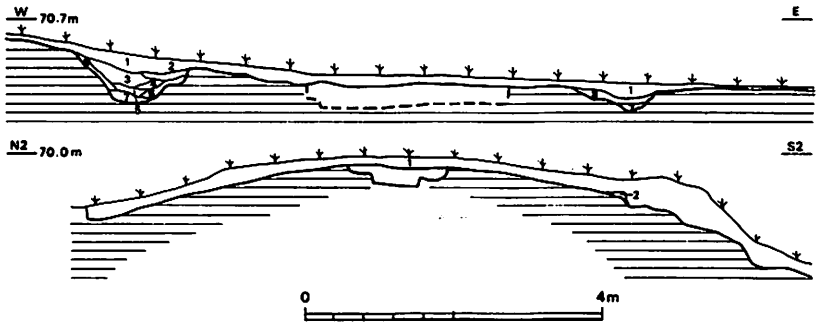
本古墳は，西側の溝を第６号古墳の東側の溝と共有しているかにみえる。立地は，第６号古墳と同様丘陵尾根頂部にある。第５号古墳の東約48m，第８号古墳の西約17mである。第６号古墳と接する溝は，暗黄褐色砂から黄褐色土まで計８層の堆積が認められる。堆積状態からみると，最初に堆積した暗黄褐色砂は，第６号古墳から流入したものとみられるが，両古墳の新旧関係を明確にすることはできなかった。

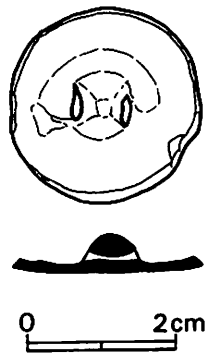
墳丘は，東西6.5m，南北７mの方形である。墳丘の現存高は約0.5mである。墳丘は，尾根にほぼ直交する２本の溝（幅1.1～1.6m，深さ0.3～0.5m）によって区画されたものである。旧地形は，主体部付近で約32度南に曲がっていて，しかも尾根幅は若干狭くなっている。そのため，東側の溝は，若干浅く短いものとなっている。盛土とみられる部分は，第６号古墳同様薄い（厚さ約10～15cm）が，地山等高線からみると，主体部の南側は，かなりの盛土をして整形したものとみられる。

主体部は二重土坑で内部に組合せ式木棺を埋置したものである。主軸はN25°Eで，頭位は東である。二重土坑の規模は，１段目長さ278cm，幅116～128cm，深さ６～22cm，２段目長さ

260cm，幅63～77cm，深さ10cmである。床面はほぼ平坦である。掘り方内部には，３層の土が認められ，中間に赤褐色土（朱を含む）が厚さ２～３cmみられた。

遺物は，土坑中央のやや東寄りの黄褐色土中から鏡１面が，鏡面を上にして出土した。鏡は小型素文鏡である。径26mm，厚さ１mmで，鈕は径９mm，高さ４mmで，径２mmの穴がある。重量は3.8gである。鏡面は漆黒色を呈しツヤがあるが，鏡背には細かい凹凸がある。

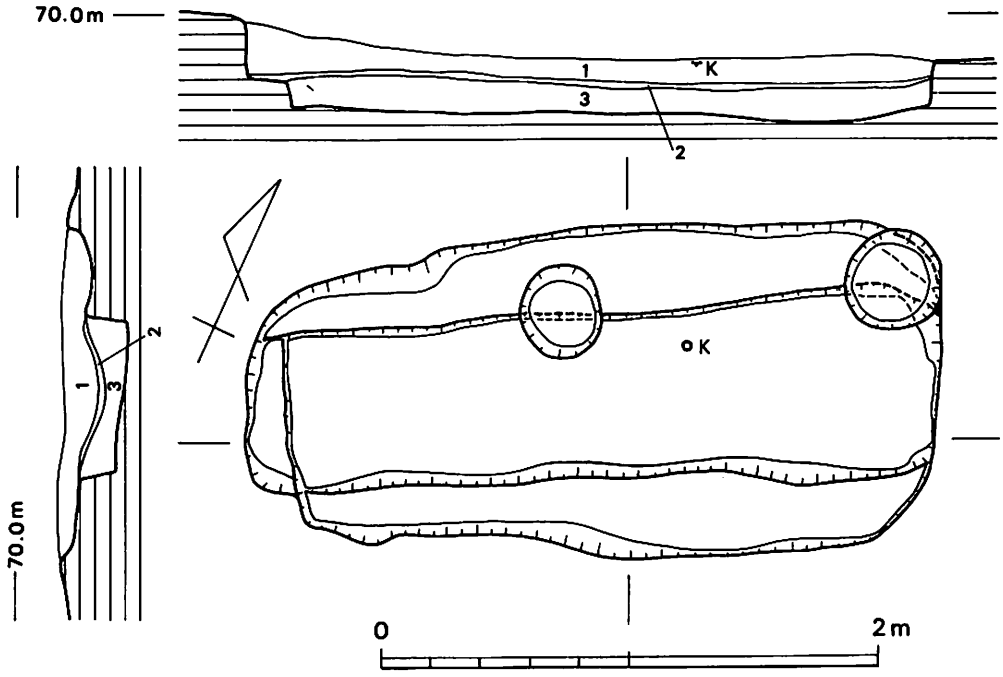




第６図　第７号古墳墳丘断面図（1/100）

1．黄褐色土　2．暗褐色砂質土　3．暗褐色質土　4．黄褐色砂土
5．褐色砂質土　6．暗褐色粗砂　7．暗黄褐色砂　8．暗黄褐色土
9．花崗岩風化土

第７図
第７号古墳出土素文鏡実測図（1/1）

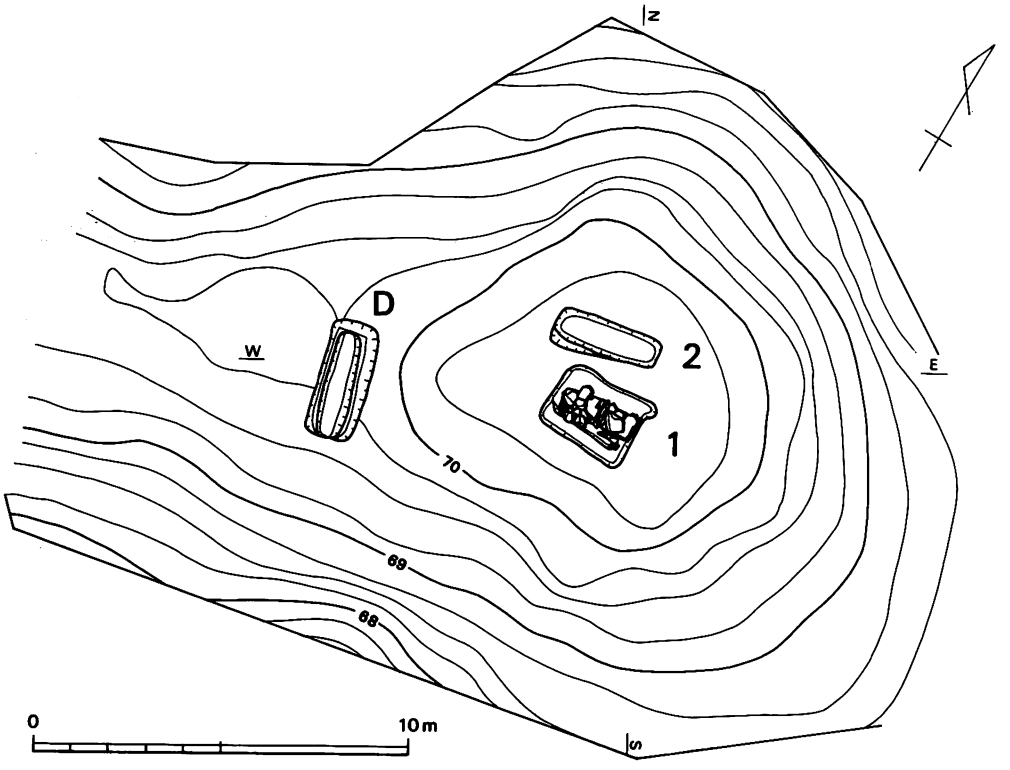


第８図　第７号古墳主体部実測図（1/30）

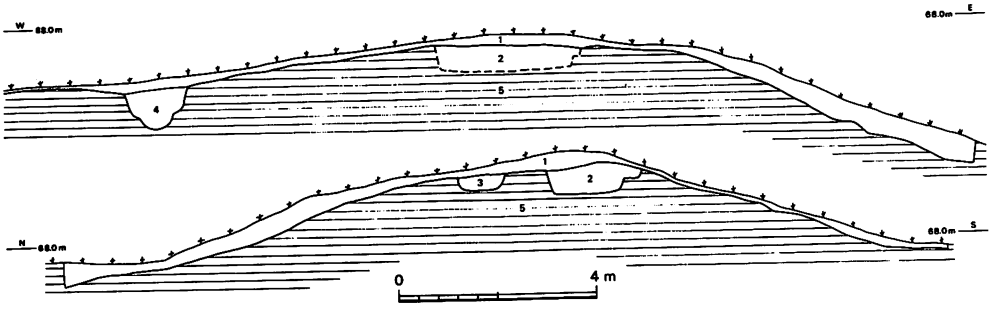
1．黄褐色土　2．赤褐色土　3．暗黄褐色土　K，鏡

3　第８号古墳（図版４・５・６）

本古墳群の東端に位置する円墳である。標高70.8ｍ，水田面からの比高約40ｍを測り丘陵頂部に立地する。この地点で，尾根は南に屈曲している。墳丘の規模は，南北13.5ｍ，東西14ｍ，高さ２ｍである。花崗岩風化土の地山を削り出して整形した後，部分的に盛土したものである。地山上には，10～30cmの厚さで黄褐色バイラン土が堆積していた。墳丘の周囲には，葺石などの外部施設はない。また，尾根続きの西南部及び東南部において，墓域を区画する溝も設け

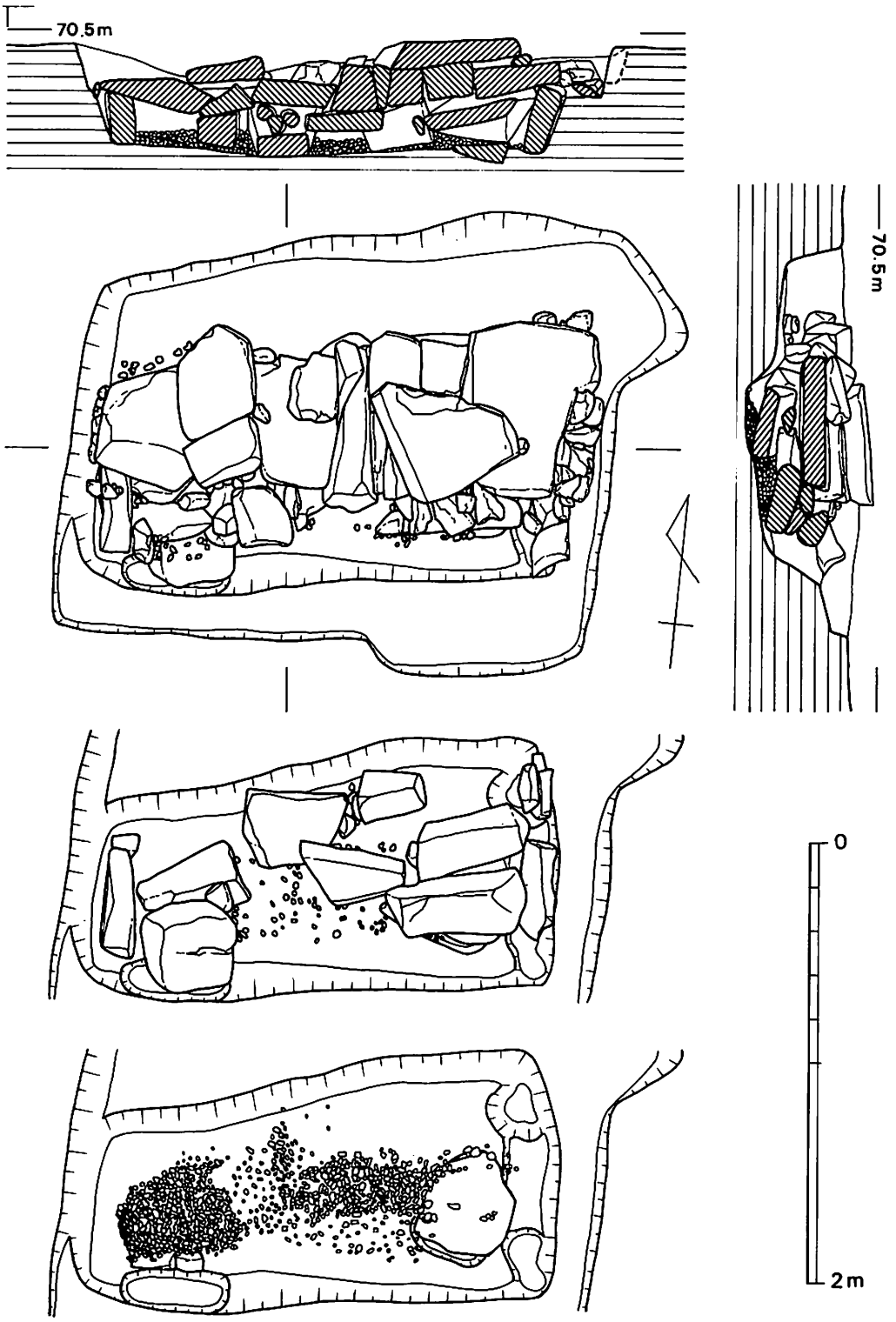


第９図　第８号古墳及び土坑墓実測図（1/200）



第10図　第８号古墳墳丘断面図（1/150）

1．黄褐色バイラン土　2．第１主体　3．第２主体　4．土坑墓　5．花崗岩風化土

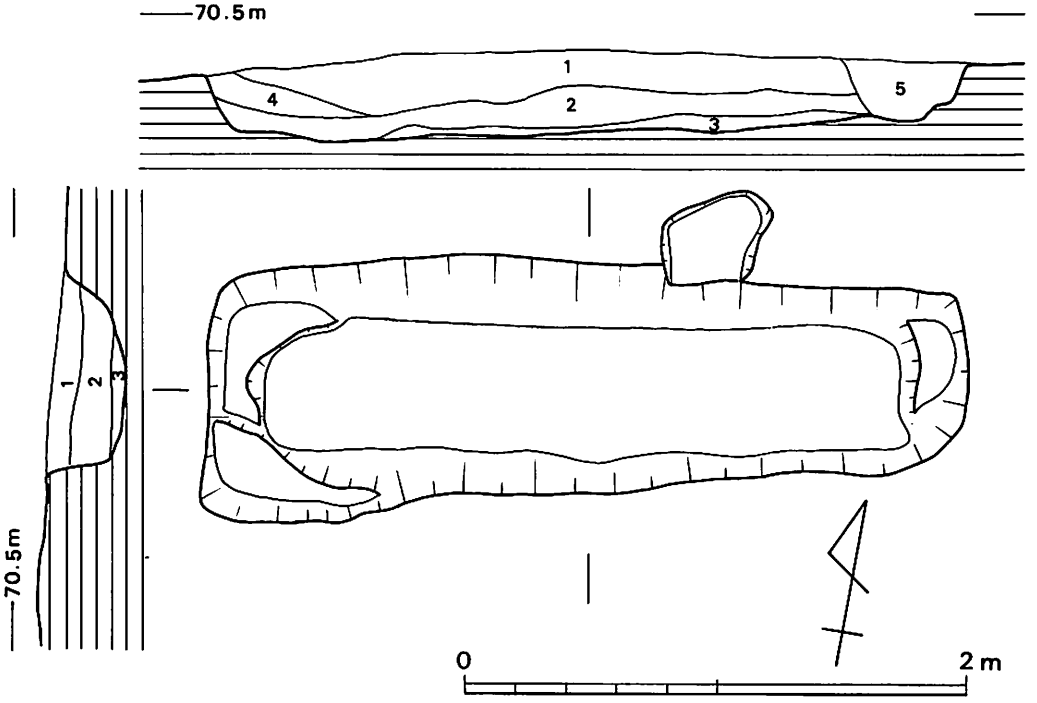


第11図　第8号古墳第1主体部実測図（1/30）

られていない。頂部から裾部まで，ほぼ同じ傾斜が続いているので，墳裾を決定するのは困難であった。しかし，墳丘北側及び東側で，傾斜変換点がかすかに認められた。

内部主体は，墳丘頂部に２基確認された。主軸は，いずれもほぼ東西で，並行して埋置されていた。内部構造は，箱式石棺と木棺直葬の土坑である。石棺を第１主体とし，土坑を第２主体と呼ぶことにした。

第１主体　中央部よりやや南に偏在して構築され，東西方向（N89°E）に主軸を持ち，頭位は東である。箱式石棺は，その蓋石及び小口石はあまり乱れていなかったが，側石はほとんどが北側に倒れこんでいた。主体部はまず，墳丘頂部の地山に，長さ2.6*m*，幅２*m*，深さ0.6*m*の墓坑をほぼ垂直に掘り下げ，その中に箱式石棺を構築していた。この墓坑は，南側では，二重土坑のように段を持つが，北側にはない。石棺は内法で長さ180*cm*，幅は小口石の法量から頭辺47*cm*，足辺48*cm*，深さ23*cm*である。石材は，扁平な花崗岩が主で，蓋石10枚，小口石２枚，側石７枚である。板石の他，人頭大から拳大の不定形な石が数十個みられた。これは側壁の高さを一定にする為や隙間を埋める為に用いられたものである。棺床には径３～４*cm*の玉砂利を，２～５*cm*程の厚さで一面に敷きつめていた。また，東側頭部付近には枕石と考えられる板石が埋めこまれていた。



第12図　第８号古墳第２主体部実測図（1/30）
1．黄褐色砂質土　2．黄褐色土　3．明黄褐色砂質土　4．明黄褐色土　5．攪乱土

遺物は，棺内から刀子１と人歯19が検出され，棺床には少量の赤色顔料がみられた。

刀子（第13図，図版６）　鉄製の直刃である。刃部中央部から先端部にかけて欠損している。刃部は現在32㎜残っており，幅７㎜，背部厚さ２㎜を測る。茎は長さ12㎜，幅５㎜，厚さ1.5㎜を測る。茎部には柄とみられる木片の圧痕があり，木目は茎背部の方向に対し30°上向きの角度になっている。

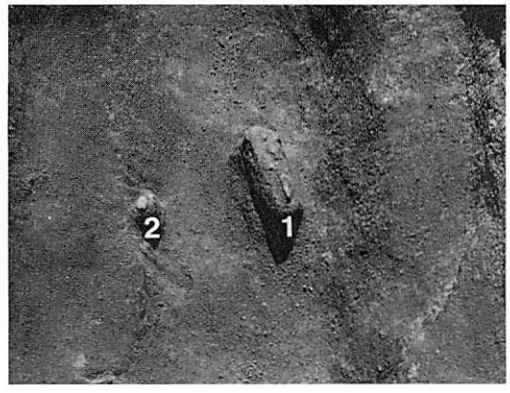
第13図　第８号古墳第１主体出土刀子実測図(1/2)

人骨（図版６）　歯が19本確認された。その内訳は，前歯１・小臼歯５・大臼歯５・臼歯（破片のため部位不明）８である。臼歯はほぼ揃うが，前歯は15本不足している。

第２主体　第１主体の北側に沿って造られた土坑である。主軸は東西方向（N78°E）であるが，第１主体より９度北にふっている。全長304㎝，幅75㎝（東側）～100㎝（西側），深さ33㎝を測る。土坑の構造は，二重土坑ではないが，坑内東端に１面，西端に２面の平坦面が作られている。掘り方は，ほぼ垂直に掘られている。床面は平坦でなく，中央部が少しくぼんでおり，横断面はゆるやかなカーブを描くU字形を呈している。このことから割竹形木棺（径約45㎝，長さ約125㎝）が使用されたものと考えられる。土坑内の土は３層に分かれ，上から暗黄褐色土，黄褐色土，淡黄色土であった。淡黄色土は，ガラス粉状の目の細かいものであった。内部からは，遺物や赤色顔料等は検出されなかった。また，第２主体は，第１主体よりも墳丘の中心部からさらにずれていること，主軸も若干ずれていることからみて，第１主体が作られた後に構築された可能性が強い。

4　土坑墓（図版５・６）

第８号古墳の西側墳裾に位置し，主軸を南北方向（N20°E）に持つ土坑墓である。この土坑は，花崗岩風化土の地山に直接掘り込まれているのみで，墳丘などは持たない。尾根筋に直交してつくられ，床面は南側に若干低く作られている。土坑は二重土坑になっている。まず長さ321㎝，幅108～120㎝（南～北）深さ60㎝の土坑を掘り，さらにその床面に長さ270㎝，幅60㎝，深さ23㎝の土坑を穿っている。二段目の土坑は，小口はほぼ垂直に掘り込まれているが，横断面はU字形を呈している。このことから，埋葬主体には，割竹形木棺（径約40㎝）が用いられたものと考えられる。土坑内の土層は，二段目の土坑上面まで黄褐色土が埋まり，赤褐色土，黄色土と続いている。黄色土は，目の細かいガラス粉状のものであった。赤褐色土は，黄色土より目が粗く，赤色顔料によって赤く染まっていた。遺物（鉈，



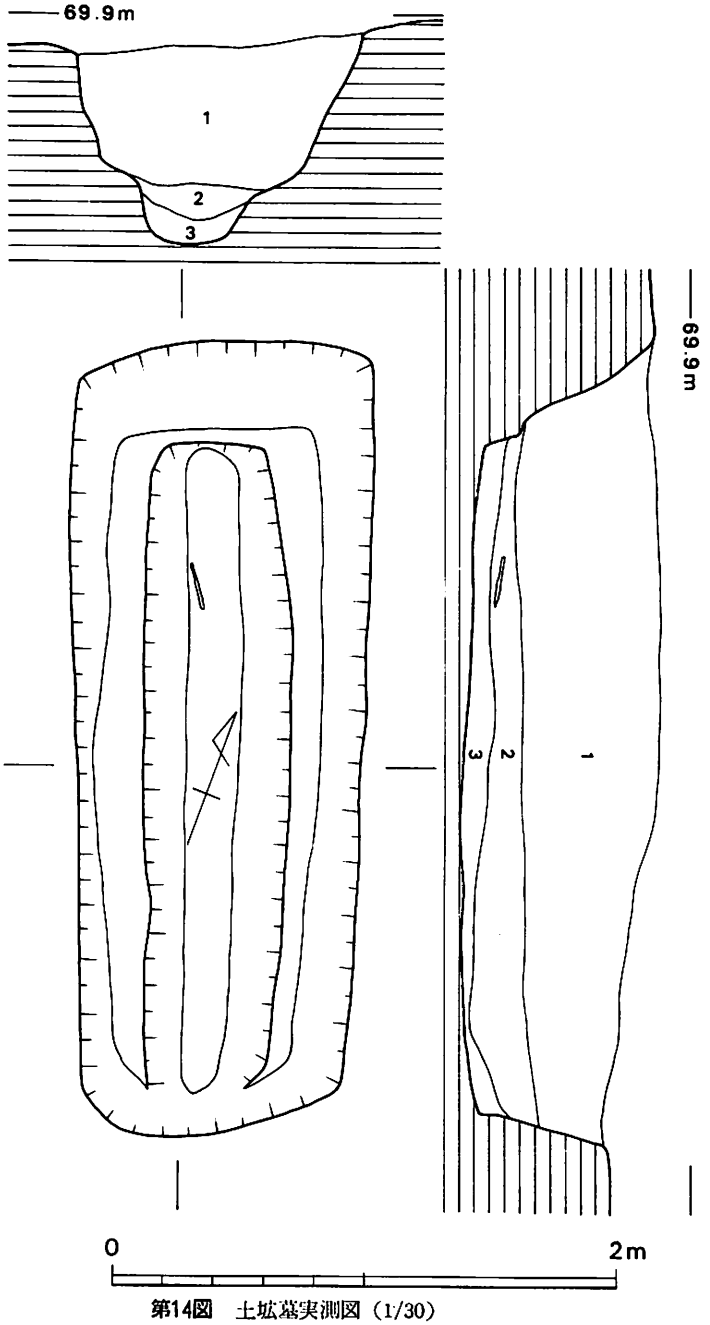
土坑墓遺物出土状態（北から，１＝鉈，２＝土師器片）

土師器片）は，この赤褐色土中から出土した。

遺物は，出土位置や層位からみて，被葬者の頭部付近の木棺直上に置かれていたものと考えられる。鉇１，土師器破片が検出されたが，土師器破片は小さいため詳細は不明である。

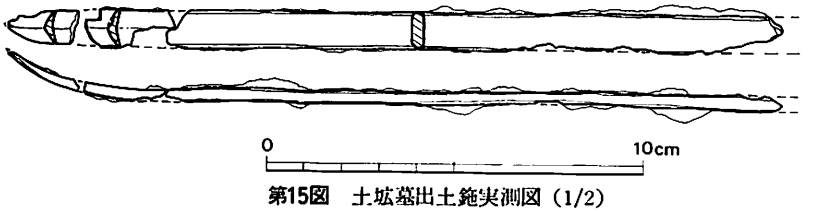
鉇（第15図）刃部中及び茎部後端を欠失しており，腐食は著しい。現存長20.5cmを測る。

刃部は長さ３cm，幅１cm，厚さ0.3cmで，大きく（14mm）上方に反っている。表面には鎬があり，裏面にはゆるやかな裏スキ（１mm）がある。茎部は扁平で，幅１cm，厚さ３mmを測り，断面は矩形である。茎部は，端部を欠失しているが，現存長17.5cmである。木や布の痕跡はみられない。現重量21.1gである。



第14図　土坑墓実測図（1/30）

1．黄褐色土　2．赤褐色土　3．黄色土



第15図　土坑墓出土鉇実測図（1/2）

Ⅳ まとめ

石鎚権現古墳群は，８基の古墳で構成されるもので，本書に収録したものは，第６～８号古墳の３基及び土坑墓１基である。いずれも前半期のもので，芦田川下流域の右岸における古墳のあり方の一部があきらかになった。以下その要点を集約してまとめにかえたい。

立地　いずれも丘陵尾根上にある。立地から分類すると，第１～４号古墳（Ａ群）と第５～８号古墳（Ｂ群）の２群に分けることができる。標高は60～75ｍにあり，第１・２・５号古墳が最高所に位置している。水田面からの比高も30～45ｍあり，駅家・神辺地区を一望のもとに収めることができる。

墳丘　いずれも地山を掘削して墳形を整え，わずかに盛土したもので，自然地形を利用したものである。規模は，第８号古墳が径14ｍ，第６・７号古墳が辺長約７ｍで，小規模なものである。墳形は，円墳（８号）・方墳（６・７号）の２種で，特に方墳のあり方は注目される。尾根に直交する溝で墓域を区画した簡素なもので，しかも一本の溝を共用しているかにみえるのは，密接な関係を暗示するものである。

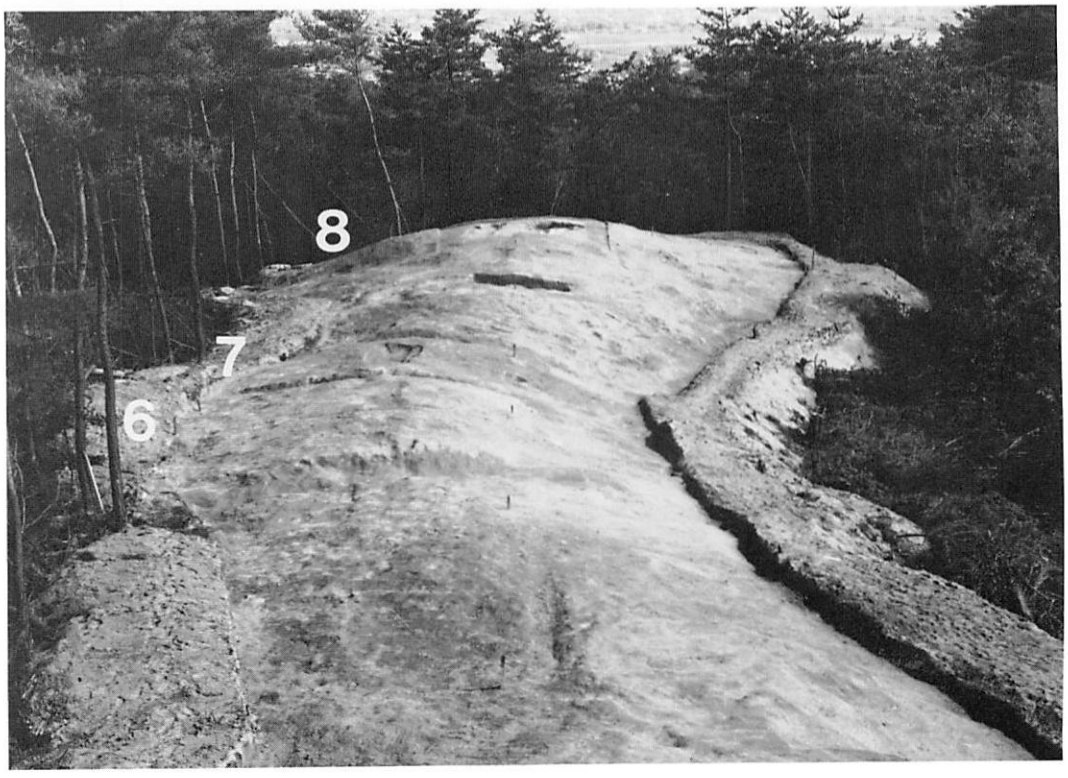
内部主体　組合せ式木棺・割竹形木棺・箱式石棺がある。木棺はいずれも土坑内に直接収められているが，第６号古墳の場合，坑底に礫を敷いていた。また，土坑に収められていたのも割竹形木棺で，木棺が多くみられる。第８号古墳の主体部のあり方は，対岸の才谷第３号古墳[(1)]を想起させるものである。

出土遺物　小型素文鏡，鉇，刀子各１点，土器片２，人骨の歯19で，質・量とも貧弱である。素文鏡は，径26㎜と非常に小さなものであるが，鏡としての形態は整っており，鋳上りも良い。類例は，最近鳥取県長瀬高浜遺跡[(2)]でも出土しているが，当遺跡の場合，副葬品としてではなく，祭祀品として用いられたものである。この種の鏡は，いわゆるミニチュア品で，祭祀用のものが多く，第６号古墳のように副葬されているものは少いようである。

年代　内部主体の構造や副葬品のあり方，須恵器が全くみられない点などからみて，いずれも前半期のものである。しかし，年代推定の好資料となる土器は，第６号古墳裾出土の土師器１点のみである。土師器は，須恵器と共伴しない古式のもので，実年代は４世紀末～５世紀前半とみられる。各古墳の築造順序は明確でないが，ほぼ同時期のものであろう。

被葬者　第６～８号古墳及び土坑墓は，その位置関係からみて，密接な関係を持っていたものと考えられる。特に第８号古墳の場合，夫婦墓の可能性が大きい。第５号古墳（前方後円墳）や南接する今岡遺跡（土坑墓群）との関係も今後追求すべき課題である。

（注）１　広島県教育委員会『県営駅家団地造成地内遺跡発掘調査報告』1976。
　　２　鳥取県教育文化財団中部埋蔵文化財調査事務所「鳥取県羽合町長瀬高浜遺跡」『考古学ジャーナル』№. 181　1980。



△調査前全景（西から）　▽調査後全景（西から）

図版 2

△第 6 号古墳全景（西から）　▽同主体部（南から）

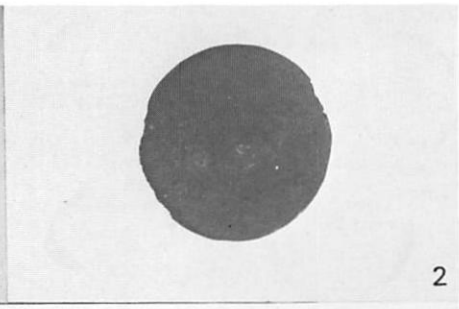
△第７号古墳全景（東から）　▽同主体部（西から）

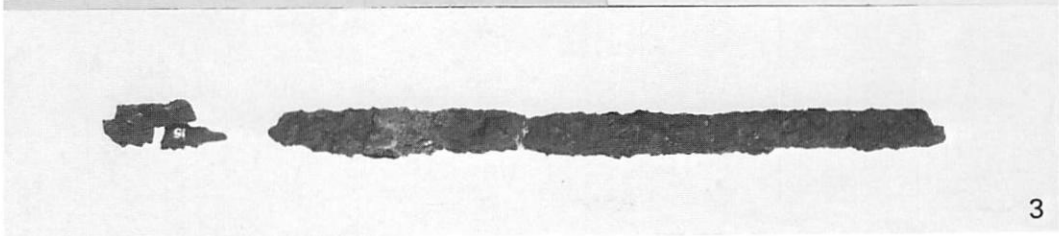
図版 4

△第 8 号古墳全景（西から）　△同主体部（西から）

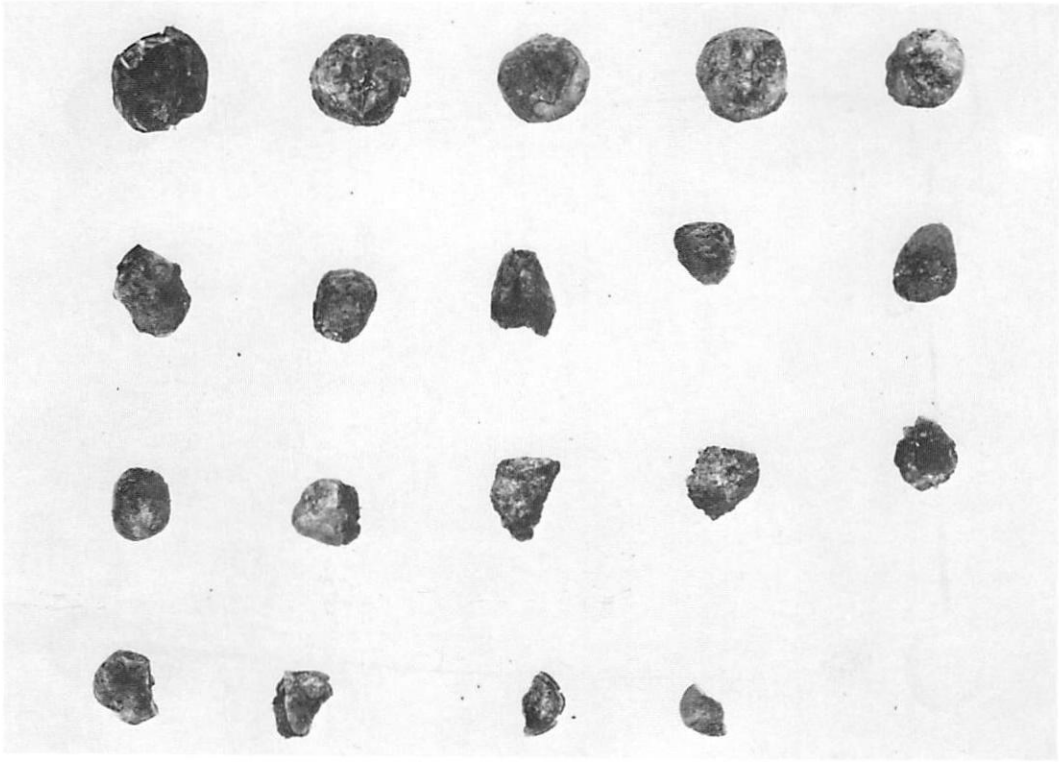
△第８号古墳第１主体　◁蓋石除去後　▷側石除去後（西から）　▽土坑墓（西から）

図版 6





1　第６号古墳出土土師器
2　第７号古墳出土小型素文鏡
3　土坑墓出土鉇
4　第８号古墳出土刀子



△出土土器及び金属製品　▽第８号古墳第１主体内出土人歯

昭和56年(1981) 3月31日

石鎚権現古墳群発掘調査報告
——第6・7・8号古墳——

編集・発行　広島県教育委員会

印　　刷　株式会社 柳盛社印刷所